

わたしのしゃしん 【低学年3 - (2)】

- 終末に歌を取り入れた取組み -

(1) 主題名 かけがえのない命 [3 - (2)] 関連項目 [4 - (2)]

(2) ねらい 一人一人に命があることに気付き、生命を大切にしようとする心情を育てる。

(3) 資料名 「わたしのしゃしん」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 赤ちゃんについて話し合う。	だれの声でしょう。 ・赤ちゃんの声。	赤ちゃんの泣き声を聞かせて、児童の関心を高める。
展開	2 資料「わたしのしゃしん」を聞いて、話し合う。	小さな声で返事をしたわたしは、どんな気持ちだろう。 ・手伝いたくないな。 ・妹のほうがいいな。 赤ちゃんのころの様子を聞いた時、わたしはどんなことを思つただろう。 ・今のわたしが元気なのは、お母さんやおばあちゃんのおかげなんだな。 ・命って大切なものなんだな。	状況を把握しやすいように、部分提示をする。 友だちと同じように妹がほしいという気持ちに気付かせる。 資料を臨場感あふれるように読み、赤ちゃんの時からしっかりと生きようとしていることに気付かせる。
開拓	3 自分の経験をふりかえる。	弟をじっと見つめている時の私は、どんな気持ちだろう。 ・いっしょにけんめい動かしているな。 元気に大きくなつてね。 ・弟も私と同じ命をもつてゐるんだな。 今まで成長してきて、楽しかったこと、うれしかったことは、どんなことですか。 ・なかよしの友だちと遊べること。 ・自分でできることができたこと。	私の気持ちをワークシートに書かせ、どの命もかけがえのないものであることを感じ取らせる。 元気に生きているからこそ可能のことであることをおさえる。
終末	4 「手のひらを太陽に」を歌う。	・元気に楽しくすごそう。 ・みんな大切な命をもつてゐるんだな。	歌詞の意味を考えながら歌わせる。

わたしのしゃしん

弟が生まれました。でも、わたしはあまりうれしくありませんでした。なかよしのひとみちゃんのように、妹がほしいと思っていたからです。

今日、弟がびょういんから家へ帰ってきます。おばあちゃんがせつせと弟がねるふとんのじゅんびや、へやのそうじをしています。

「ゆりちゃんも手つだつて。」

「友だちとあそぶやくそくをしているから、帰ってきてからね。」

「じゃあ、帰つてきたら、おねがいね。」

「う、うん。」

わたしは小さな声でそう言つて、あそびに出かけました。

あそんで帰ると、もう弟は家に帰っていました。お母さんにだっこされてねむっています。

「ゆりちゃん。ほら、こうちゃんよ。」

おばあちゃんに言われても、わたしはだまつていました。

しばらくして、おばあちゃんは、わたしに一まいのしゃしんを見せてくれました。

「これはね。ゆりちゃんが生まれたころのしゃしんだよ。」

お母さんにだっこされてねむつているときのしゃしんです。よく見ると、しゃしんのわたしは、なんだか弟にしているような気がしました。

「ゆりちゃんは、体がよわくてね。よくねつを出して、そのたびに心ぱいしたのよ。でも、今では、びょう気ひとつせず、いつも元氣でいてくれるから、おばあちゃんはとてもうれしいよ。」

すると、弟をだっこしたお母さんが言いました。

「ゆりちゃんのねつが下がつて、ミルクをおいしそうにのみはじめると、ほつとしたのよ。おばあちゃんは、そのたびに、ゆりちゃんは元氣になろうと、自分の力でいっしょうけんめいミルクをのんでいるのよ。きっとびょう気にはまけないわ。とはげましてくれたのよ。」

それを聞いていたおばあちゃんも、うなずいています。

わたしは、もう一どしゃしんを見つめました。しゃしんのわたし、今の弟のように見えてきました。弟を見ると、目をつむつたまま、小さな手を動かしています。わたしは弟をじつと見つめました。

活用に生かすための実践報告

「わたしのしゃしん」

1 主題の設定

低学年の児童は、本資料の主人公のように「友だちと同じように妹がほしい」と自己中心的な考えをもつことが多い。そこで、生命あるものすべてをかけがえのないものとして尊重し、大切にしようとする態度を育てていくためにこの資料を作成した。資料から、生まれてきた弟にも自分と同じ命があることに気付き、自他の生命を敬う気持ちが芽生えるのではないかと考える。

2 指導過程の工夫

赤ちゃんの写真、泣き声の入ったCDを資料として活用した。児童の視覚や聴覚に訴えることで、資料への興味付けを図ることができると考える。

終末で、児童がよく知っている歌を歌うことで、自分が生きていることへの感動や喜びを一層感じられるようになると考へる。

また、保護者に授業に参加していただきて、保護者とともに命について考えたり、話し合ったりする活動をすることも考えられる。

3 発問の工夫

「赤ちゃんのころの様子を聞いた時、わたしはどんなことを思っただろう。」という発問では、命があるからこそ、ミルクを飲んで元気になろうとしていることが気付けるような補助発問を児童の心の動きにあわせてするとよい。

終末で、歌詞を掲示して、この歌に込められている願いは何か考えてから歌を歌うと効果があると考える。

4 児童の反応（ワークシート）

- ・弟をおうえんしたくなつたな。
- ・元気に育つてほしいな。
- ・弟にも大切な命があるんだ。かわいいな。
- ・こうちゃんも元気よく手を動かしている。
- ・わたしといっしょで生きているんだな。

5 実践者からの一言

本資料は、今自分が担任している学級の児童が、普段のかかわりのなかで話してくれた内容をもとに作ってもらった資料である。その児童は、授業で書いたワークシートに「人間の命はみんな同じだ。」とその時の気持ちを素直に書いていた。男女の関係なく、命が大切な命であることを感じ取ってくれたのではないかと思う。

終末に、生きていることのすばらしさを感じることができる歌を歌うことで、自分の命（存在）の大切さに意識が向くようになったと思われる。

事後の取り組みとして『こころのノート』P 53 に保護者に児童が生まれたころの様子を書いてもらい、それを読む活動を行った。自分が生きてきたあしあとを振り返り、これからも命を大切にしようとする意識をもつことができた。今後は、自分の命だけでなく、命あるものすべてを尊重する心を育んでいくよう、継続して指導していきたい。

（柿浦小学校 奥本雅幸）